日本文学全集

5

蜻蛉日記

和泉式部日記

更級日記

枕草子

方丈記

徒然草

日本文学全集 5

蜻蛉日記
和泉式部日記
更級日記
枕草子
方丈記
徒然草

河出書房新社

日本文学全集 5　蜻蛉日記他

© 1960

編集委員
青野季吉　荒　正人
川端康成　瀬沼茂樹
中島健蔵

装幀者
原　　弘

N D C

昭和35年11月5日初版印刷
昭和35年11月10日初版発行

定価　290円

訳者代表　室生犀星
発行者　河出孝雄
印刷者　中内佐光
印　　刷：暁印刷株式会社
製　　本：岸田製本紙工業株式会社
本文用紙：王子製紙工業株式会社
同納入：株式会社大和屋洋紙店
クロース：日本クロス工業株式会社
同納入：株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話東京(291)3721～7
振替口座　東京10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

蜻蛉日記……一
和泉式部日記……二七
更級日記……一八九
枕草子……三三五
方丈記……四二
徒然草……四三五
注釈……池田弥三郎……五一五
解説……池田弥三郎……五三三

蜻蛉日記

室生犀星訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

巻の上

天暦八年（九五四年）――安和元年（九六八年）
道綱母十九歳――三十三歳
兼家二十六歳――四十歳
道綱――十四歳

生涯ももう半ば過ぎて、今ではこの世になんのなすこともなく、中途半端な状態で生き長らえている私であった。顔容貌だって人なみではなく、気性もしっかりしているわけではないから、こんなにはかない暮らしをしているのももっともとは思うものの、ただ毎日をものうく明かし暮らし送るうちに、世間に多い古物語の端々などを取り上げてみると、ずいぶんひどいそらごとさえ書かれているようである。自分は人なみでもない身の上なのだが、それをありのままに日記に書いてみたら、かえって珍しがってくれる人があるかもしれぬ、また門地の高い人の暮らしはどんなようすか世間の人が知りたいとき、これをその一つ話としてほしいとも思うのだが、なにぶん遠い年月のことなので記憶もうすれ、そのまま書かずにおけばよいことを、たくさん書いてしまったことになるかもしれない。

さて、取るに足らない淡々しかった好きごとの話は別として、――その年の初夏のころ、兵衛佐をしていらしたあの方（兼家）から、突然私に求婚の御文をよこされたのであった。普通の方なら、仲介者を求めるなり、召使の女などに取りつがせるのが例なのだが、あの方は役所で私の父に冗談ともまじめとも、そのどちらにも思えるこなしでほのめかしたりして、とんでもないと父が答えたのも気がつかないふうで、いきなり馬に乗った人をよこして門をたたかせたのであった。だれからなぞと聞かせるには、相手はあまりはっきりしているし、周囲のものが騒ぐのでとほうにくれて取り入れたが、侍女たちが興奮してまた大きな騒ぎとなってしまった。見ると料紙なぞもこういう場合にかなったものではなく、ひじょうにおりっぱだと平生から聞いていた御手跡も別人ではないかしらと思うほどへたなので、どうもすべてが疑わしかった。書いてあったことは、

音にのみ聞けばかなしなほととぎす
こと語らはむと思ふ心あり

（今は時鳥の季節ですが、評判だけ聞いているのでは

かなしいから、お会いして話し合いたいと思います）

返事をしなければわるいかしらと皆で話し合っていると、昔気質の母が出て来て、しきりに恐縮してすすめるので、私の方でも歌をものした。

語らはむ人なき里にほととぎす
　かひなかるべき声なふるしそ

（話し合う人もいないような所でございますから、どうぞむだなことをなさらないように）

これを最初に再三よこされたが、返事もしないでいると、またお手紙をよこされた。

おぼつかな音なき滝の水なれや
　行くへも知らぬ瀬をぞたづぬる

（あなたは音なしの滝のようにたよりないお人だ。いつになったらお会いできるのでしょうか）

こんなお歌に、「やがてこちらから御返事をさしあげます」と言ってやったのが、あの方には愚かにも見えたのだろう、またつづいて、

人知れず今や今やと待つほどに
　返り来ぬこそわびしかりけり

（こっそりと今か今かとお待ちしているのに、御返事のこないのは心細いことです）

と言って来た。母が、「恐れ多い、てきぱきと御返事なさるがよい」なぞと言って、能筆の侍女に適当に書かせてお返ししした。それでさえまじめに喜んで何度もお手紙をおよこしになる。また添えてある文面を見ると、

浜千鳥跡もなぎさにふみ見ぬは
　われを越す波うちや消つらむ

（おたよりをいただけないのは、あなたには私よりもっと親しい人があるせいでしょうか）

今度も、例の美しい手で返事を書いてくれる侍女に任せて紛らわした。しかしまた御文が来たのだった。

「まじめに代筆の返事がいただけるのは、たいへんうれしいことですけれど、この手紙に御自身がお書きになった返事が来なかったら、どんなにつらいことでしょうか」など尋常な文の端に書き添えてあった。

いづれともわかぬ心は添へたれど
　こたびはさきに見ぬ人のがり

（どちらも区別しない気もちでおりますが、今度は前に見なかった人のもとにこれをさしあげます）

と書いてあったが、いつものように私は人任せでさばいてしまった。こんなふうで恋愛というほどの交際もなく、ありふれた消息のやりとりなどをして、いたずらに月日を過ごしていたのであった。

秋になって、

「分別くさく見られるのがつらくて、がまんしていましたけれど、もうどうにもおさまらなくて」というお手紙

を添え、こんな歌が来た。

鹿の音もきこえぬ里に住みながら
　あやしくあはぬ目をも見るかな

（町中に住む身には鹿の鳴く音も聞こえはしないのに、ふしぎに眠られぬ夜をなやんでいます）

私の返事、

高砂のをのへわたりに住まふとも
　しかさめぬべき目とは聞かぬを

（あなたは山中に鹿といっしょに住んでおいでになっても、そんなにお目ざめがちな方とは聞いていませんが）

「ほんとに変わったおこころでございます」とだけ言ってやった。またしばらくすると、お歌があった。

逢坂の関やなかなか近けれど
　越えわびぬればなげきてぞふる

（逢坂山はすぐ近くですが、越えにくくて悲しんでいます）

越えわぶる逢坂よりも音に聞く
　勿来をかたき関と知らなむ

（逢坂の関よりも、来るなという意味の勿来の方がずっと越えにくい関所だとお思いください）

などと御返歌したけれど、私の心はどんなふうに動いていたのだろうか。何度も歌を贈り答えしているうちに、とうとうあの方をお通わせするようになってしまった。

ある朝、

夕ぐれの流れ来るまを待つほどに
　涙おほゐの川とこそなれ

（夕ぐれを待っている間にもう涙が頬ににじんできます。会いたくて）

こんな後朝のお歌に対し、私も返歌をした。

思ふこと大井の川の夕ぐれは
　心にもあらず泣かれこそすれ

（物おもいの多い夕方は、すぐにもかなしくなってまいります）

そして三日目のお祝いの朝、

しののめにおきける空は思ほえで
　あやしく露と消えかへりつる

（あけ方に別れて帰る時は、人心もなく、まるで置く露のかそけさで消えてしまいそうです）

とまたたよりをいただいたので、私の方でもお返しをした。

定めなく消えかへりつる露よりも
　そらだのめする我はなになり

（そんなつれない露よりも、あてにならない人をあてにする私のはかなさは、いったいなんと言ったらよいのでございましょう）

こうしてごくありふれた状態で日が過ぎていったが、まもなく私がよそへ出かけて行ってそこに滞在していた家にいらしって、泊まってゆかれたりした。翌朝、「今日一日だけでものんびりしたいと思っていたが、なんだか迷惑そうだったので帰ってしまった。どうしたのか、私にはあなたのなさることが私をさけるために山籠りしていられるとしか思えないが」と言ってきた。私はただ歌だけで御返事した。

思ほえぬかきほにをれば撫子の
花にぞ露はたまらざりける

(思いがけぬ場所に来ていますと、自分の身の上がかえりみられてとめどなく涙ぐんでまいります)

日を送るうち、やがて九月になってしまった。晦日のころ、引きつづいて二晩ばかりいらっしゃらない夜があって、手紙だけが来たものだから、こちらからこんな歌を言ってやった。

消えかへり露もまだひぬ袖の上に
今朝はしぐるる空もわりなし

(消える思いで明かした袖もかわかないのに今朝はまたしぐれが降って気がかりなことです)

折り返し、すぐに返事があって、

思ひやる心の空になりぬれば
今朝はしぐると見ゆるなるらむ

(あなたのことを思えば空といっしょになって、私のこころがしぐれのように見えるのでしょう)

と慰めてきたので、私がその返事を書きかけていると、ふいにご本人が見えたのであった。しかしまたしばらくたって訪問が絶えているころ、ちょうど雨の日、「夕暮れに行こう」など言って来られたが、私の方でも恨みがちだった。

柏木の森の下草暮ごとに
なほたのめとやもるを見る見る

(あなたの下に身をよせて生きている私は、毎夜会えないのを嘆きながら、やはり移り気なあなたをたよりにしなければならないのでしょうか)

そんな歌を贈ってみたが、あの方は御自身でやって来て、返事は紛らしてしまった。

十月になって、こちらで物忌に引きこもってだれにも会わないでいる間を、なんだか不安そうに心配されたようすで、

嘆きつつ返す衣の露けきに
いとど空さへ時雨添ふらむ

(せめて夢の中で会いたいと衣を裏返しにして寝たのだが、やはり眠れないで涙にぬれ、そのため空もいっそう時雨めいてくるらしく思われる)

私の返事はたいへん古風なものになってしまって、

思ひあらばひなましものをいかでかは
　返す衣のたれも濡るらむ

（思いの火があるならかわきそうなものですのに、なんで返した衣がだれもぬれるのでしょうか）

などと、まるで昔の歌のような調子で申しあげるのであった。

そのうち、私のほんとうにたよりにしている父（倫寧）が国守に任ぜられて、いよいよ陸奥へ旅立つことになったが、時節はたださえあわれの深い秋のことだし、夫とたのむあの方にもまだそんなに慣れなじんだというほどでもない。いらっしゃるたびに私はただ涙ぐみとほうにくれているばかりで、心細いことはたとえようもないくらいだった。あの方はそういう私の気もちを引き立てようとして、身にしむような言葉つきで、けっして見捨てるようなことはおさせしないから安心していらっしゃいと言ってくれるのだが、人間の心なんてそんなに当てになったためしはないと思ってみたり、ただむやみに心悲しいことばかり考えつづけられていた。いよいよみな出発という日になって、行く父の方でも涙を止めかねるほどだったが、あとにのこる私たちの方はまして言葉にもできないほど別れを惜しんでいたので、出発の予定時刻が延びてしまった。そしてまた顔を見合わせては悲しんでいたが、父は形見の硯に何か文のようなものを巻き込んで、またほろほろと涙ぐみながら家を出られた。私はしばらく見る気にもなれなかったが、もうすっかりあとを見送ってしまったので、なんだかためらいがちにそれをひらいて見ると、

君をのみたのむ旅なる心には
　行く末遠く思ほゆるかな

（あなただけをたよりにして遠く旅立って行く身ですが、どうぞ娘との行く末がまどかであるよう祈ります）

と書いてあった。私の夫に読んでほしいというのだろうと、なんだかそんな親の心がせつないような気がし、もとのとおりに巻いておいた。しばらくしてあの方が来たようだった。目も見合わせないで私が思い沈んでいると、「どうなされた、こんなことは世の常のことではないか。そんなに悲しんでばかりいるのは、私をたよりにしていないと受け取ってもよいことになる」などとほどよく取りなしているうちに、ふと硯の中の手紙に気がついて読み下し、「ああ」と言ったまま外へ出て行った。門のところで、

われをのみたのむといへば行く末の
　松のちぎりもきてこそはみめ

（私だけを信頼すると言われますが、私は心丈夫です。末長く二人の仲をどうぞ来て見てください）

と一首の歌を言いのこして行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

こうして日がたつうちに旅へ出立した父のことを思いやるだけでも、なんとなく心細いのに、あの方の心も何かあまりたのもしそうにも見えない気が、交じりながら私を嘆きに誘うた。

十二月になって、あの人は比叡山の横川に参籠する用ができて、寒いのに登って行かれた。

「だれもかれもみな雪に降りこめられて、たいそう心細く、恋しさも堪えがたい」と使いに言ってこさせたので、私は歌をつけて返した。

氷るらむ横川の水に降る雪も
わがごと消えてものは思はじ

(凍っているだろう横川の水に降る雪も、私ほどは悲しい物思いはいたしますまいに)

その年もまたはかなく暮れてしまった。

正月時分に、二三日見えない日がつづいた間に、よそへ出かける用ができたので、「使いが来たら渡しておくれ」と言って、私は歌を置いて行った。

知られねば身はうぐひすの振り出でつつ
鳴きてこそ行け野にも山にも

(行く末のことも不安なので、私はうぐいすのように野山に出てさすらい鳴くようなみじめさでございます)

それに返事があった。

鶯のあだに出行かむ山べにも
鳴く声聞かばたづぬばかりぞ

(鶯のように浮気をして出て行っても、その美しい声を聞いたら私は山の中へでも尋ねて行くことを、いつも心に決めております)

そんなことがあるうちに、私はどうやらからだが普通でないようすで、春から夏へとずっとなやみくらしていた。八月の末にようやく道綱が生まれたのだが、その間じゅうさすがにあの方は親切にあつかってくださるようすであった。九月ごろになって、ある日、ちょっと外出せられた留守に、手箱が置いてあるのをなにげなく手慰みにあけてみたら、だれかのところへ届けようとした文があった。あきれはてた気がしたが、せめてその文を見たというきびしさだけでも知られたいと、書きつけておいた。

うたがはしほかにわたせる文みれば
ここやとだえにならむとすらむ

(よその女におあげになるお文を見ると、もうここへはおいでにならなくなるだろうと心がかりになります)

など心の中を述べてみたが、どうしたのか十月の晦日ごろに三日もつづけさまにいらっしゃらない晩があった。

「薄情なふりをして、お前の気もちをしばらくためしているうち……」なぞとやがてやって来てきげんを取っていらして後、

「ちょっとのがれがたい用があるので」と言って、ここから夕方出て行こうとされるのであった。へんに思って人に跡をつけさせてみたら、

「町の小路にあるこれこれでおとまりになりました」と言って帰って来た。やっぱりそうだったのか……と胸もいたむ思いで数日を過ごしていると、ある明け方あの方はまた門をたたいておいでになるのであった。そうらしいとは思うが、くやしいのであけさせないでいると、例の女の家と思われる所へ行ってしまった。が、朝になってそのままにしておくのも気になるので、

嘆きつつ*ひとりぬる夜のあくる間*は
いかに久しきものとかは知る

（嘆きながらひとり寝ている夜の、あの長い夜明けを待つ苦しみがどんなに長く堪えられないものかおわかりでございますか）

といつもより少しひきつくろった字で書いて、色あせた菊にさして持たせてやった。すぐに返事があって、

「お前が戸をあけてくれるまで待とうとしたのだが、急用のたよりを持って来る者に会ったので、……ほんとにしかたのないこと……」

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸も
おそく明くるはわびしかりけり

（なるほど冬の夜は明けにくいが、槇の戸もなかなか明けてくれぬのはつらいもの）

それにしてもこちらで、どうもへんなことだとこんなに疑わしく思っていることを、まるで何事もなかったといったふうである。いましばらくの間でも、私には女のことをないしょにしているようすでも作って、「内裏へ」など言っておだましになってくれられないものかと、いよいよ気にくわないなさり方だと、つくづく小づらにくく思われた。

年改まってやっと三月になった。お節句には桃の花なぞを飾りつけて、うきうきと待っていたのに、とうとうお見えにならなかった。近ごろ姉のところへお通いになって来るもう一人の方（為雅）も、いつもは立ち去りかねるほどの深い気もちなのに、どうしたのか今日はお見えにならない。そうして四日の早朝になって、二人そろってやって来た。昨夜から待ちわびていた侍女たちが、せっかく用意したものをそのままにしておくよりはと言って、あちらからもこちらからも準備の品を持ち出して来た。あんなに心をこめて準備してあった花を折って内所の方から取り出して来るのを見ると、私はふと腹立た

しい気もちになって、手習いでもしているようなようすで、

待つほどのきのふ過ぎにし花のえは
今日折ることぞかひなかりける

(待っていた昨日が過ぎてしまったので、花の枝は今日折ってもなんのかいもありませぬ)

と書いて、もうどっちでもいい、どうせ憎らしいのだから、と思ってかくしてしまったのに、あの人はふとようすを気取って奪い取り、返事をした。

三千歳(みちとせ)を見つべき身には年ごとに
すくにもあらぬ花と知らせむ

(行く末長くちぎるはずの私には、今さら事あたらしく愛情のこまやかさをとやかく言うほどのことはありませぬ)

それを姉の所へ来るもう一人の方も聞いて、御自分でも歌を作られた。

花によりすくてふことのゆゆしきに
よそながらにて暮してしなり

(桃の花のために好くのだと思われるのがいやで、昨日はわざと来なかったのです)

その前後から、もう町の小路の女のもとへ通って行くことを、わざとはっきりとそぶりに見せるようになっていった。私よりも前からの人との間さえ何か後悔しているようなようすだった。言いようもなく心うく思われたけれど、どう手のつけようもないのである。姉の方へばかり今一方が絶えず出入りするのを見つつ暮らしているうちに、どうしたのかもっと心安く過ごせる所へ行こうと、姉を家からつれ出して行ってしまった。後にのこされる私はやりきれないほど心せつなく、これからは影も容易に見られなくなるに相違ないと、真底から心沈んでいよいよ出発の車を寄せる間にこう言ってやった。

なぜかかる嘆きは繁さまさりつつ
人のみかるる宿となるらむ

(どうして嘆きだけがこんなに多くなって、人は離れて行く住まいとなってしまうのでしょう)

返事は姉のかわりに男がした。

思ふてふわが言の葉をあだ人の
繁る嘆きにそへて恨むな

(あなたのことを思っているという私の言葉を、浮気な人ゆえにするあなたの嘆きに添えて、あの人をそんなにお恨みしないように)

など言い残してやがてみな移って行ってしまった。それからはただ一人で寝起きをする身となってしまった。だいたいの生活はなんの不足もないのだけれど、ただあの人の気もちだけを恨みに思っている。しかしそれは私ばかりでなかった。このごろは長い間のちぎりで本邸に住

んでいる時姫のところさえ、とだえがちだという噂なので、文など通わすついでがあったので、五月三四日のころこんなお見舞いを贈ってみた。

そこにさへかるといふなる真菰草
いかなる沢に根をとどむらむ

（あなたの所さえ離れているということですが、いったいあの人はどこに通っているのでしょうか）

すぐに返事が来た。

真菰草かるとは淀の沢なれや
根をとどむてふ沢はそことか

（離れていったのは私の所でしょう。あの人の通っているのはあなたの所と聞いていますが）

痛い歌だった。六月になりその月初めにかけてひどい雨がしとしと降りつづいた。退屈でぼんやり庭をながめているうちにひとりごとのように歌を作ってみたが、慰められるものではなかった。

わが宿のなげきの下葉色ふかく
うつろひにけりながめふるまに

（長雨に庭の下葉も色あせたが、私も物思いに沈んでいる間にきりょうが衰えてしまった）

やがて七月になった。いっそ二人の仲が絶えてしまったのなら、かえってたまに来るよりはましだろう、などと思いつづけているときに、ふとたずねて来たひと日があった。ものも言わないから、なんとなく寂しくもの足りないようすだったので、そば仕えの侍女が前の下葉の歌のことを話のついでに言い出すと、あの方はじっと聞いていてこう言った。

をりならで色づきにけるもみぢ葉は
時にあひてぞ色まさりける

（その時期でもないのに色づいた紅葉は、ちょうど時節にあっていっそう美しくなったではないか）

しかたなく私も硯を引き寄せて、

秋にあふ色こそましてわびしけれ
下葉をだにも嘆きしものを

（下葉の色づくのでさえ嘆いて見いる身ですから、すっかりあきられてしまうのはとても悲しい）

こんな状態でどうにか引きつづいて来ることは来ていたが、心のうち解ける夜とてなく、だんだんお互いに気まずくかたくなになっていった。たまにたずねて来てもふきげんな顔を見せるので、あの人の方でもそちらがそのつもりなら、と気色ばんで帰るようなこともあった。隣家のよく事情を知った人が、出て行くのを知って歌を詠んだ。

藻塩やく烟の空に立ちぬるは
ふすべやしつるくゆる思ひに

（くよくよしてふきげんでいらっしゃる顔を見るの

は、あの人もおもしろくなくて帰って行くのであろう）などと、隣人から差し出口が出るほど、お互いに恨みごとを言い合ったあげく、最近はほんとうに長い間訪れて来ない。普通のときならなんでもなかったのだが、私はこのごろ魂が遊離でもしたように、ぼんやりとしてしまい、なんでもなにげなく置いてあるものがふと見えなくなってしまう状態だった。これではしようがない、何一つ思い出の種さえなかったんだなぞと思っていると、十日ほどたって手紙が来た。なにくれと書いて、

「帳台の柱に結びつけておいた小弓の矢を取って届けておくれ」とあったので、まだこんなものが残っていたのかと思いながら取りおろした。

思ひ出づる時もあらじと思へども
矢といふにこそ驚かれぬれ

（あなたのことなぞ思い出すときもあるまいと思っていましたのに、や、と言われて驚きました）

と書いて持たせてやった。

こうして仲が絶えていた間、あいにく一条西洞院の私の家は、あの人が内裏へ参上したり東一条の本邸へ退出したりする道筋に当たるので、夜中となく暁となくせきばらいなどをして前を通って行くのが、聞かないでいようと思っても、耳についてよく寝入ることもできなかった。夜どおし眠らないでいるので、ああの人が通ると伝わってくる気もちは、たとえるものがないくらいだった。今はせめてあの人のことは見聞きしないでいたいと思っていると、「昔熱心にお通いになった方も、今はいらっしゃらないそうですね」などとだれかが召使たちに話をしているのを聞くと、胸がつまりそうで、夕方はことにもの悲しかった。子どもがおおぜいいると聞いていた時姫の所も、いまはぜんぜんお通いが絶えてしまったという噂なので、ましてどんなに悲しい思いをしていらっしゃるかと、またたよりを書いてみた。九月ごろのことだった。身にしむような文面に歌を添えた。

吹く風につけても問はむささがにの
通ひし道は空に絶ゆとも

（風が吹くにつけてもおたずねいたします。たとい蜘蛛ならぬあの人の通った道はむなしく絶えてしまいましても）

返事も今度はこまごまとあった。

色かはる心と見ればつけて問ふ
風ゆゆしくも思ほゆるかな

（風につけて問うてくださるのはありがとうございますが、その風が秋風ではあの浮気な人の心のようでこころからうれしくはありません）

などと添えてあった。こうしてぜんぜん訪れないというふうでもなく、ときどきたずねて来たりして冬になって

しまった。私はただ毎日を、幼い道綱*一人を慰め相手にして、「いかでなほ網代の氷魚にこと問はむ何によりてかわれを問はぬと(拾遺集)」なぞいう古歌を、心にもなく口ずさんでいたのであった。

また年が変わって春になった。このごろ読むというので持ち歩いている書物を忘れていき、召使の女を取りによこした。包んでやる紙に、

ふみおきし浦も心も荒れたれば
跡をとどめぬ千鳥なりけり

(あなたも荒れた浦に来なくなった千鳥のように、書物まで取りによこして離れてしまう気でいらっしゃるのでしょう)

と書いてやったら、返事は気のきいたふうに、

心荒るとふみかへすとも浜千鳥
浦にのみこそ跡はとどめめ

(お前は心が荒れたと言って本を返してくれても、私はお前のところ以外に通う所があろうはずがない……)

と言って来た。また使いの便利があったので、歌を贈った。

浜千鳥跡のとまりをたづぬとて
行くへも知らぬうらみをやせむ

(浜千鳥がとまるあし跡をたずねて嘆くように、私はどこまで嘆き暮らすことでしょう)

そして夏になった。

得意絶頂の町の小路の女の所で、子どもを生むころになって、このお気に入りの女をつれて、一つ車に相乗りで、京じゅうを鳴り響かせて、ほんとうに聞きづらいほどの大騒ぎをし、この家の門前をわざわざ通って行くということがありうることだろうか。私はただあっけにとられてものも言えないが、親や召使を初めとして、「まったく胸の痛む仕打ちだ。他に道があるまいことか」などと口々に言い騒ぐのを聞くと、ただ死んでしまいたいと思うが、それもままならぬことなので、もう今後は絶対に会うことだけはやめてしまいたい、ほんとにいやなことだと思っていた。すると三四日ばかりたって手紙が来た。あきれるばかりで、なんだかきみが悪いと思いつつ見ると、「このごろここに取り込みがあって参上できなかったが、昨日無事に生まれたようなのでそちらへ伺ってもよいのだが、お前の方でお産のけがれをきらうかと思って」と書いてあった。ますますあきれ、こんなことはまたと世にあるとも思えないので、ただ「御文をありがとう」とだけ言ってやった。侍女が使いの者に聞くと「男君です」というのを聞いて、何か胸がふさがるようだ。また三四日ほどして御自身で平気な顔をして見えた。何が来たのかと見むきもしないので、ひどく間が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook